



付12話 大学に就職して最初のコンピュータ

博士課程に進学して直ぐに、実家を出てアパートに下宿した。家賃と生活費はバイトで、学費は奨学金でやっていけると親を説得した。大学在学中に学位論文を仕上げるつもりでいたが、細部の詰めが甘く、論文提出に至らず、卒業となった。これを名大では単位取得満期退学という。

学生生活も終了、4月から出勤。大学に出かけ、M先生に挨拶に行くと、研究室の片隅に机と椅子があり、そこで早く学位論文を仕上げろと言われた。3年間助手生活を過ごしたが、助手としての仕事はほぼなく、勤務時間はひたすら研究に充てる。教室会議に出席し、議事録を書く仕事ぐらいで当時の様子をほとんど覚えていない。ただ、個性的な教員が多かったことを記憶している。助手は研究用助手と演習用助手に分かれており、前者は、講師に昇格するまでに講義用ノートを整え、研究を続ける。学位を取得して講師に昇格すると学務が始まる。当時の大学は今と違ってとてもおおらかである。

学科の先生は大方知っており、研究室を回って着任の挨拶をした。これでも多少の常識はある。最初の教室会議で顔合わせ、これで正式に建築学科の一員となった。食事会があるから来いという。出かけると新任教員、私を含めて2人に対する歓迎会である。酒宴では酒を注いで回るのが常識かも。ただ下戸の私は、娘の結婚式以外一度もやったことがない。黙々と食べ、他の先生たちを観察する。何となく険悪な雰囲気がある。どうも仲が悪いらしい。

無論、M先生はこのような会合には一切出席しない。出席するのは必要最小限、教室会議や教授会も時々さぼる。そのため、教室では浮いており、学部でも敵が多い。これは数年たってから分かったことだ。先生は頭の回転が速く、剃刀のように頭が切れる。時に人を傷つけることさえある。人を不愉快にさせる天才でもある。相手がどう思おうかはお構いなし、嫌がることもズバッという。話を少し聞いただけで反論する。「少しは話を聞いてくれ」。近くにいと少々息苦しい。

決して他人に尊敬されると人ではないが有能。外で仕事をするのが多く、研究室を空ける。その間はほっとし、勤務を忘れ、学生に戻る。そのことがM先生の逆鱗に触れ、研究室を追い出された。T先生の研究室に移動した後は、M先生との関係も良くなり、通常の仕事ができるようになる。やはり、難しい人とは距離を置くに限る。

研究だけでなく、少しは仕事をする。M先生が買い込んだコンピュ

タのお守りである。小型の冷蔵庫ぐらいで、オープンリールの MT が付いていた。自分が買ったマシンではないため愛着がなく、その仕様も名前も全く記憶にない。これが大学に就職して最初に出会ったコンピュータである。M 先生の仕事の一つに、地盤の常時微動観測とその解析がある。真夜中に出かけ、地震計で地盤の常時微動を計測する。この仕事は業者がやり、立ち会ったかどうかは知らないが、M 先生はそのデータを持ち帰り、私が解析する。A—D 変換機でアナログデータをデジタルに変換し、スペクトルなどを求めた。頻繁に仕事があるわけではない。まあ、暇つぶし程度である。

建築学科は理工学部の中では最も新しく、しかも弱小。序列は何事も最後で土木の後塵を拝していた。学部長は常に機械科と電気科のボス教授、ただ建前としては平等、特に予算は教員数と入学定員で分配されていた。助手生活も終わりの頃、M 先生に呼ばれ、100 万円洋書を買ってこいと言われた。金額に驚いたが、本の収集癖がある私にとって願ってもない仕事である。名古屋の丸善で洋書を物色したが、あまり欲しい本がない。どうせ買うなら構造力学や FEM 関連の本が良い。丸善担当者に相談すると、場所は定かではないが東京八重洲口の倉庫に多数の洋書が保管されており、直接必要な本を選択したらどうかと言われた。しかも旅費付き。早速、東京に出かけ、必要な本や欲しかった本を見つけ、カゴの中に放り込む。次の年も同様に 100 万円洋書を買えと言われた。丸善の担当者より学位論文のリプリント版のリストを手に入れ、そこから必要な論文を買うことにした。既に有名になった研究者の論文もあり、大変貴重な資料である。これらは全て図書館に保管される。

当時の図書館は、大学設置に必要な蔵書数をかなり下回っており、多くの専門書を必要としていた。個人研究費で買った書籍も図書館が管理し、蔵書数に数えるほどである。これが本爆買いの顛末である。

当時の建築学科の教員構成は年齢や職域などバランスが悪く、将来を見越した人事ではない。特に技術系の演習用助手が 3 人おり、将来の処遇に困っていた。M 先生は誰もが嫌がる仕事を引き受け、3 人を退職させた。ただ大学院へ進学、設計事務所の開設と不安を除いてからの退職である。少しは優しさもある。

M 先生の研究室は構造実験室横の準備室 2 室の内の一室を使用、外から電気の点灯が見えないので、在室が否か全く分からない。ここが気に入っているのか、他大学に移籍するまでここにいた。後に私も思い出の研究室に移った。一般の研究室は大型の講義室を分割して、ゼミ生と共用、縦長で使いづらい。「まあ！弱小学科なので仕方がないか」。